

---

# Anchor

ウメミヤウラタカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Anchor

### 【Nコード】

N8196V

### 【作者名】

ウメミヤウラタカ

### 【あらすじ】

地球上の幽霊・吸血鬼・能力者を取り仕切る、言わば警察にあたる、統制院の下っ端の地域担当要員のメリーと、巻き込まれた楠真衣のストーリー 更新遅いですが、よろしくお願いいたします。

## メリーさん

「なんだ。空振りか。」

噂通りの少女はおらず、彼は帰ろうと振り向いた。

「呼んだ？私のこと。」

笑う少女の手元には携帯電話が握られていた

これが21世紀のメリーさんらしい。

メリーさんも携帯電話を持ちましたってオチ？なんとも微妙。

情報科のパソコン授業の問題を終え、私はオカルトサイトで時間をつぶしていた。

ブラウザのブックマークに登録されていたのを何気なくクリックし、半分下らないと思いつつも読み進めていた。すると、先程の「メリーさん」に会う方法が書かれていた。

“ 電鉄 駅を降り、出口とは反対方向を向き、「メリーさん」と呟く。そうするとメリーさんが現れる。”

その駅は、学校の最寄り駅と地元駅の間にある駅。まさかメリーさんが近くにすんでいるとか？

下らないと思っていた話がすごく身近に感じるようになった。

学校を終え駅に向かうと先発の電車は普通電車だった。普通電車しか止まらない”あの駅”に私を導いているとすら感じた。電車に乗り、車内を見回す。いつも通りの車内だけどこの中にメリーさんがいたりするの？

電車は一駅一駅近づく。あの駅で降りることに恐れも感じていても……

ブシューウ

ドアが開いた瞬間私は駅に降り立った。

他の乗客が駅の端にある唯一の駅へ向かう中、逆を向き立ち尽くす。なかなか言葉がでてこない。

「メリーさん」

その瞬間何処かで聞いたことのある声が聞こえた。

「呼んだ？私のこと？」

本当にいた。でも様々な感情で振り向くことができないでいる。

ブウー　　ブウー　　ブウー

恐る恐る電話に出ると先程の声が流れてきた。

「いい加減こつちみてよ。私を呼んだのは楠さんでしょ？」

なんで私の名前を知ってるの？振り向いた瞬間、その理由が分かった。

「私メリーさん。ビックリした？」

「えっ　　林崎さん？」

そこにいたのはクラスメイトの林崎さんだった。

「車内で”メリーさん”を探してたみたいだけど、自分と同じ制服着てるとは思ってなかったみたいね。」  
携帯をしまって言う彼女に反応できない。まったくもってその通り。異変なんて感じられないにきまつてる。

「せっかくだから私の家に来ない？来ないと言われればそれはそれで困るんだけど？」

笑顔で言う林崎さんの言う通りにした方がいいだろう。断れば何かされるかもしれない。

「・・・分かった。」

「よかった。さあ行きましょ。」

階段を降り、改札を抜けた。駅前にはコンビニしかなくて、ごじんまりとしている。周りをきよろきよろ見回して、緊張していると私自身感じる。

「楠さん、メリーさんは信じてた？」

ふと質問してきた。

「まさか本当にいるとは思ってなかったけど・・・。」

「私は本物ではないわよ。言ってしまうえば便乗かしら。あのサイトの話を書いたのは私。」

やはり林崎さんが書いたのか。ブックマークに登録したのもそうだろう。

「じゃあ、幽霊とか吸血鬼とか不老不死とか。そういうのはいると思っっ。」

「会ったことないしなんとも・・・。」

「そうよね。でも私が日本でいう魔法使いって言えば？」

急にとんでもない事をいいたした。林崎さんが魔法使い？

「魔法使いって言い方は可愛らしくて好きじゃないけど。そして生きてる年数も楠さんの10倍以上あるわ。」

今度は不老不死。林崎さんは冗談を言うキャラではないけど、そうとしか思えなかった。

駅から歩き始め、次第に大きな洋館に向かってしているとわかった。何十年前からある様な趣。

「まあ信じられないだろうけど。とりあえずお茶でも飲みましょうか。」

そういって、洋館の扉を開く。ここが林崎さんの家なのか・・・

「独り暮らしだから誰もいないけど。」

そういって招かれたリビングは何十畳もあり、とても一人暮らしには向かない広さ。

「まずそうねえ 私が”魔法使い”って証明したほうがいいかしら。」

私を席に座らせてそう言った。洋館にびっくりしてちょっと忘れていた。

「一つ目 電気を消してみる。」

お互いに紅茶を一口した後、林崎さんがこう呟いた全ての照明が消えた。

ふと立ち上がり窓に移動すると、

「二つ目 時間を止めてみる。ここからは海が見れて綺麗なのよ。」

私を窓へと呼んだ。私も立ち上がって窓を覗くと、そこには海沿い

を走っているはずの車が止まっていた。まるで動画の一時停止みにたいに。

「三つ目 服装を変えてみる。」  
すると、林崎さんの服装が制服からメイド服に変わった

「どう？似合うかしら？」

林崎さんの笑みにどう答えればいいのか、わからなかった。

「なんでそんな格好なの？・・・」

「女主人とメイドを明確に区別するために必要とされた経緯がある。」 wikipediaには確かこう書いてあったわ。当時の私は主の方だったけど。」

「なら今は女主人さんがいるってことですか・・・」

「うん 今目の前にいる人がその候補なんだけど。」

「はあ？」

「私をメイドにしてみない？期限無制限・給与不要。なかなかいい話だと思うけど。」

林崎さんの言ってる意味がわからない。

「い、いやぁ 実家住まいだし 逆に困るって言うか・・・」

「学校生活のサポートならどう？ 登下校から授業のノートまで家庭教師だって」

「メイドさんがいるとか・・・ みんなに笑われるでしょ」

「お望みなら他人には内緒でいいわよ 私はメイド服で登校してもいいと思ってるけど。」

「いや メイド服で登校とかやめて・・・」

「なら私を使用人にするか、毎朝学校でメイド服の私に「ご主人様私を雇ってくださいませ」と挨拶されるの、どちらがいいかしら。」

「なにその二択！どっちも嫌にきまつてるでしょ。」

「なら学校でお願いするしかありませんねえ」

あの林崎さんが私のメイドさんになるといいました・・・

「じゃあなんで林崎さんは私のメイドさんになりたがるの？」

「もちろん見返りを求めてはいるわ。でも楠さんには極力迷惑をからさないようにするけれど。まずは私のことから話したほうがいいわね」

そして林崎さんが説明を始めた

「日本には警察がいるわね。全国のあらゆる事件事故を担当するけれど、世間では存在されていないとされる私たちは自らそういった機関を作ったの。」

”統制院” 幽霊、吸血鬼、そして私のような存在。いわゆる”i s t” これら人外の警察として設立されたわ。」

「幽霊とか吸血鬼ってほんとにいるんだ」

「そう。特にこのあたりは多くて、そのために地域担当として配置されたのが私 統制院の下っ端の下っ端だから”アンカー”っていわれてるけれど。」

話は林崎さんが”i s t”と呼ばれる魔法使い(?)である前提だった 本当にそういうのがいて、すでにそういう組織も整備されているらしい。

「アンカーは、地域の人外すべてをリストアップし、統制院に送るんだけど、正直確認できているのは一部。吸血鬼やi s tの中には統制院に反対しているのもいるからね。」

この屋敷に閉じこもっても情報は入ってこないから、人間に扮して高校生をやってみても、情報が入ってくる所か友達すらできないし。

楠さん、私嫌われてるかしら。」

林崎さん、それはクールビューティーなあなたのせいです。



「だから人間と同じ行動をとることで情報を得ようと、楠さんのメイドになると言ってみただけど。理解してくれただけかしら。」  
なんとなくは理解した。結構突拍子もない事をやり出す人なんだなっということも。

「でもどうやってその情報を林崎さんに提供するの？ そんなの知らないんだけど。」

「人間にとっては都市伝説みたいな幼稚めいた事が、実は人外が絡んでたりするの。そんなので結構だわ。」

林崎さんの要求はわかった。でもこれだけで私のメイドさんになるとは仕事熱心なことなのかな

「林崎さんって仕事熱心なんだね。」

「まあ 給料上がってくれるならそれなりに頑張るよね。」  
金銭的な理由か・・・

「それに、なんか面白いでしょ？メイドさんごっこ。」

林崎さんの笑み この人はますますわからない人だ。

「それで、私の主になっていただけのかしら？」

「学校みんなに内緒なら・・・まあいいよ。」

そう よかった そう言ったと思いきや林崎さんは私にむいて跪いた

「突然のお願い失礼いたしました。私、林崎八重ことメリーは、楠真衣様を主とし、メイドとしてお仕えさせて頂きますことを誓います。」

何時も、お呼びであれば真衣様の元に参ります。なんなりと申しつけ下さいませ。」

「ほんとにメイドさんだね なってあげる。」

そうして、私は林崎さんではなくて、メリーと呼ぶようになった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8196v/>

---

Anchor

2011年10月9日10時27分発行